

要 旨

「提示→理解→練習→産出」の各段階で、日本語と英語の語順の違いを意識した文法指導を行い、単元を通して、発話を促す言語活動を行った。「英順ルーラー」や「英順シート」を用いて語順指導を行い、スキット活動とスピーチ活動を通して、自分の考えや気持ちを正しい語順で書くことができるようになることを目指した。単元を通して、日本語と英語の語順の違いを対比させた文法指導を行い、発話を促す言語活動を段階的に行うことによって、自分の考えや気持ちなどを正しい語順で表現する力が身に付いた。

〈キーワード〉 ①語順指導 ②英順ルーラー ③英順シート ④段階的な言語活動

1 研究の目標

自分の考えや気持ちを英語で伝える力を育成するために、中学校英語科において、言語活動と一体的に行う文法指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

平成20年度の中央教育審議会答申において、コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力が十分に身に付いていないことが課題として指摘された。そのことを受けて、平成20年3月に告示された中学校学習指導要領には、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」⁽¹⁾と明記された。また、中学校学習指導要領解説外国語編では、「基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとして捉え、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る」⁽²⁾ことを重視している。以上のことから、文法は単なるルールではなく、メッセージのやり取りをするコミュニケーションにおいて情報を正しく相手に伝えるために重要な役割を担っており、英語における思考力・判断力・表現力を高め、円滑に豊かなコミュニケーションを行うためには、その土台となる文法事項の定着が不可欠であると考えられる。

平成26年度に実施された佐賀県小・中学校学習状況調査〔12月調査〕では、中学2年生の「書くこと」の領域に関する「一般動詞を含む過去形の平叙文を対話の流れに応じて疑問文にする」という問題の正答率が32.8%であり、一般動詞を含む過去形の疑問文の構造を理解し、語と語のつながりに注意して正しく書くことに課題があることが分かる。さらに、4月に実施されたNRTテストの所属校中学2年生の結果から、「書くこと」の領域における疑問詞の語順整序問題に関して、単語の意味や働きから単語間の結び付きを理解して適切な語順で文を書くことや疑問文の語順に課題があることが分かった。英語では意味の伝達において語順が重要な役割を担っている。国立教育政策研究所は「書くこと」に関して、文構造を理解して文を作る力を育成するためには、語順に注意して文を書く活動を行うことが重要であり、必要に応じて、日本語との比較により、英語の文構造の理解を促す活動を提案している。自分自身の英語科の実践を振り返ってみても、文法指導の際の語順指導が不十分だったために正しい語順で書くことができなかった生徒が多くいた。この課題に対応するために、文法事項を指導する際には、英語と日本語の語順の違いに留意し、学習した文法事項を使用場面に応じて活用させるような授業を仕組む必要があると考える。

そこで、本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、自分の考えや気持ちを英語で伝える力を育成するために、言語活動の中で語順を意識した文法指導の在り方を探る。

3 研究の仮説

文法の指導過程において、英語と日本語の語順を対比させた文法指導を行い、単元を通して、発話を促す言語活動を段階的に行えば、場面や状況に合わせて、自分の考えや気持ちなどを正しい語順で表現する力を育成することができるであろう。

4 研究方法

- (1) 英語の文法指導（語順指導）と言語活動に関する理論研究
- (2) 英文を「話すこと」「書くこと」について、質問紙分析による意識調査と実態調査の考察
- (3) 仮説を検証するための授業実践及び考察

5 研究内容

- (1) 英語の語順の指導方法と言語活動に関して、先行研究や文献等を基に理論研究を行う。
- (2) 「話すこと」「書くこと」に関する生徒の実態調査や意識調査を基に、生徒の変容を分析し、手立ての有効性を検証する。
- (3) 所属校の中学2年生における単元「道案内」（3時間）と単元「自分の好きなこと・もの」（3時間）で検証授業を行い、仮説の有効性を検証する。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

中学校学習指導要領解説外国語編では、文法をコミュニケーションを支えるものとして捉え、文法指導については、言語活動と一体的に行うよう改善を図ることを挙げている。文法指導について「書くこと」の領域で見ると、「(イ) 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと」の項目では、語と語のつながりを明示して語順の重要性を強調している。田地野彰が「英語は固定語順言語であり、英語の指導には語順指導の役割は極めて重要である」⁽³⁾と主張しているように、英語では意味の伝達において語順が重要な役割を担っており、生徒に英語の文構造や語法を理解させるためには、語順や修飾関係などの特徴を日本語との対比で捉えて指導を行うことが有効であると考えられる。本研究では、コミュニカティブ・ティーチング理論を柱として、アウトプット仮説を基に語順指導法を考える。アウトプット仮説によると、発信の機会が多いほど、学習者は発話のスキルが熟達すると言われている。受信の際には学習者の注意力は意味に集中し、語順には関心が払われないので、受信だけでは語順の能力は育たない。発話して初めて学習者の注意が語順に向けられ、語順の能力が向上する。語順の定着を図るためには、相手に「理解可能なアウトプット」を学習者が産出しようと努力することが重要である。「理解可能なアウトプット」を生徒が産出するためには、文法の指導過程において、話したり書いたりするアウトプット活動の中で語順指導を行い、言語習得の認知プロセスを活性化させる必要がある。この認知プロセスとは、第二言語習得のプロセスにおける学習者の内部で起こる変化、つまり、インプットの気づき、理解、内在化、統合などを指す。この認知プロセスが連続することにより、アウトプットが可能になる。これらの認知プロセスを促す上で効果的な英語指導法を考える際、村野井仁が主張するように、教科書を用いた内容中心の指導を「提示 (Presentation) → 理解 (Comprehension) → 練習 (Practice) → 産出 (Production)」のPCPPの流れで行うことにより、教科書の題材内容を活かしながら英語指導を行うことが可能であり、学習者の認知プロセスを活性化できると考える。

(2) 研究の構想

本研究では、自分の考えや気持ちなどを正しい語順で表現する力を育成するために、第二言語習得の認知プロセスに沿って「提示→理解→練習→産出」の各段階で、日本語と英語の語順の違いを意識した語順指導を行う。単元を通して、発話を促す言語活動を行うが、特に産出の段階（アウトプット活動）に焦点を当て、その指導プロセスを語順指導の視点で捉え直す（図1）。発話を促すアウトプット活動として、スキット活動

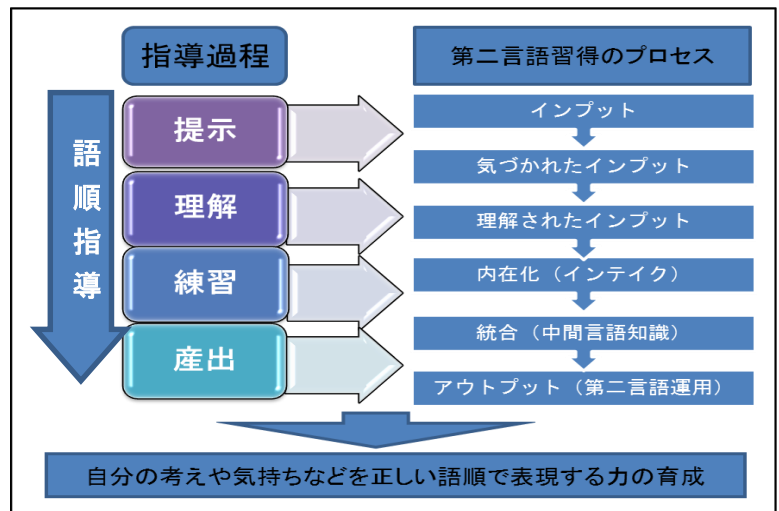


図1 研究構想図

とスピーチ活動を行う。段階を踏みながら言語活動を行わせ、既習の文法事項を用いて英文を作らせ、発表させる。スキット活動やスピーチ活動のプロセスを通して、どのような使用場面において、どのような意味を伝えるためにその文法形式が使われるのか、また自分の考えや気持ちなどを伝える際に、どの文法形式を使えば良いのかを判断させ、実際の使用場面と文法形式を関連付けさせることができる。そして考えや気持ちを伝え合う言語活動の中で、生徒が肯定文・疑問文や応答文を考えることで様々な文構造や語法の理解が促進され、どの語順で表現すれば、正しく伝わるのかを実感させることができる。英語と日本語の語順を対比させる語順指導を行い、意思の伝達を行うスキット活動とスピーチ活動の中で発話を促す言語活動を段階的に行うことによって、英語の文構造の理解を促進させ、既習の文法事項を用いて自分の考えや気持ちなどを正しい語順で表現する力を育成できると考える。第二言語習得研究では、指導方法の有効性を検証する際、「正確さ」「流暢さ」「複雑さ」の3つの言語的様相を基に分析がなされる。本研究では、「正確さ」と「流暢さ」を基に、語順が身に付いたかどうかを分析し、仮説の手立ての有効性を検証する。

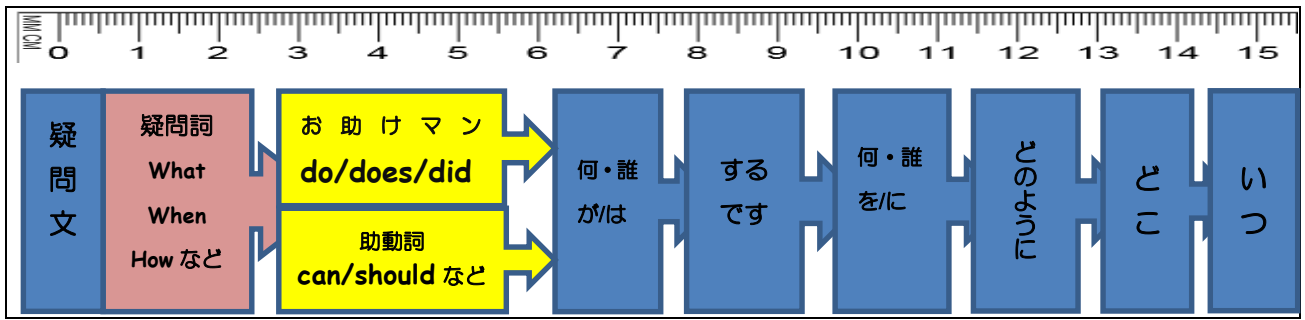
(3) 実践化への手立て

ア 英順ルーラー

日本語と英語の語順を対比させるために「英順ルーラー」を用いる。「『だれ・なにが/は』『する(です)』『だれ・何を/に』『どこ』『いつ』」という英語の語順を可視化できるようにしたカードである（資料1）。これにより、日本語と英語の語順を対比しやすくした。正しい英語の語順で書いたり、話したりするための道具として使用し、場所を移動するような言語活動においても使用できるようにした。表面は肯定文における語順で、裏面は疑問文を作る際の語順となっている（次頁資料2）。検証授業①では、意味のかたまりが分からずに英順ルーラーを上手く使用できない生徒がいたので、検証授業②では、意味のかたまりを捉えやすくするために、それぞれの要素にイラストと英語を付け加えた。



資料1 英順ルーラー【表面】



資料2 英順ルーラー【裏面】

イ 英順シート

英語の語順についての思考・判断・表現を補助するワークシートとして、英順シートを作成した（資料3）。シートの上部に英順ルーラーの要素（英語の語順）を記載したもので、語順ごとに英語を記入できる仕組みである。教師が英文を「提示」する際や、生徒が「理解」・「練習」・「産出」する際に用いるなど、指導過程のどの段階でも使用できる。英順シートを使用することで、文法や語順について理解を深め、練習し、産出するプロセスの中で、生徒は思考・判断を繰り返し、自分の考えや気持ちを正しい語順で表現することができる。また、この英順シートは英語の語順に関して生徒の理解を促進させるだけでなく、教師側にとっても、英順シートに取り組む生徒の様子から、英語の語順を理解しているかどうかを把握し、次に必要とされる指導の手がかりを得ることができる。さらに、産出の段階では、個人だけでなく、生徒同士の学び合いにも使用することができる。検証授業①では「提示」「理解」の段階で用いた。文法説明の後に、単語を英順シートに記入させたが、「ことばのかたまり」を捉えきれない生徒がいたので、検証授業②では、「理解」「練習」の段階で用いることにした。まず、英順シートを用いて語順や意味の説明を行い、音読をさせた後に空欄にした英順シートに英語を記入させ、英文の理解が深まるように工夫した。

No.	英順	What / What 名詞 How Whereなど	do canなど	お助けマン		だれ・何を/に	どのように	どこで	いつ	音読 1回目	音読 2回目	音読 3回目
		Magic Box 疑問詞 接続詞など	お助け マン	だれ・何が/は	する(です)	だれ・何を/に	どのように	どこで	いつ			
①	英順	何のスポーツ	～か	あなたは	好き		いちばん					
	English	What sport	do	you	like		the best?					
②	英順			私は	好きだ	サッカーが	全てのスポーツの中で一番					
	E			I	like	soccer	the best of all sports.					
③	英順			それは	です	一番人気のゲーム		私のクラスで				
	E			It	is	the most popular sport		in my class.				
④	英順			私は	好きだ	それが						
	E			I	like	it						
	英順	なぜなら～だから		それは	です	わくわくする						
E	because		it	is	exciting.							

資料3 理解→練習の段階で用いた英順シート

ウ 英順ルーラーや英順シートを使用した段階的な言語活動

言語活動を段階的に行うための指導過程を次頁図2に示す。「提示」の段階で英順ルーラーや英順シートを用いて英文を提示し、文法の説明を行った後、「練習」の段階で英順シートを使用して英文の

意味を理解させ、ことばのかたまりを捉えさせながらスラッシュリーディングを行った。「練習」「産出」の段階において、英順ルーラーや英順シートを使用した言語活動は以下のとおりである。

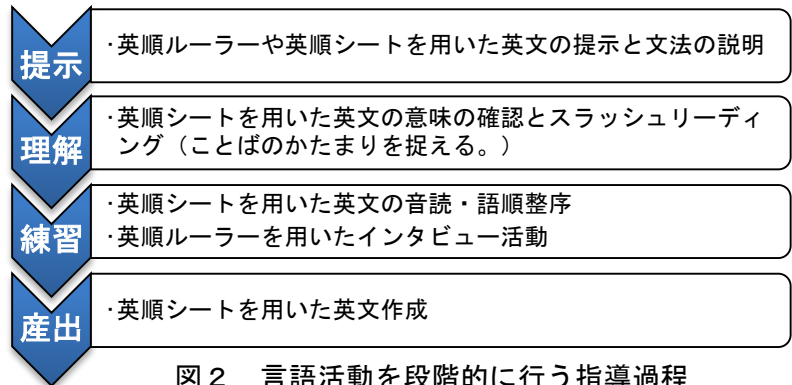


図2 言語活動を段階的に行う指導過程

(ア) 音読と語順整序練習（「練習」の段階）

新しい文法や重要表現を身に付けさせるために、英順シートを用いて音読指導を行った。書かれた英文を読む通常の音読に加え、英語の語順で書かれた日本語を見ながら、英語を音読させる（英順音読）など、生徒が日本語と英語を対比できるようにした。また、英順ルーラーを用いて音読後に語順整序練習に取り組みせることにより、文法や重要表現の習熟を図った。

(イ) インタビュー活動（「練習」の段階）

言語の使用場面や言語の働きを実感させるために、インタビュー活動を行わせた。検証授業①では道案内を、②では自分の好きなこと・ものを尋ね合うインタビュー活動を、英順ルーラーを使用させながら行わせた。言語材料を実際に活用させながら、お互いの考えや気持ちを理解したり、表現したりする中で、言語材料の定着を図ることができる。検証授業後に行った意識調査の「インタビュー活動で積極的に聞いたり答えたりすることができたか」の項目には、全体の82%（29名）が「積極的に活動できた」と答えている。「インタビュー活動では、いろいろな人に聞くことができて楽しかった」や「友達の意外な面を知れて良かった」などの感想も多く挙がった。

(ウ) スキット活動（「産出」の段階）

検証授業①では、英順ルーラーを使って、自分が表現したい日本語を英語の語順（英順）にした後、それを英語にするという手順で、スキット文を作成させた。

(エ) スピーチ活動（「産出」の段階）

検証授業②では、スピーチ文を正しい語順で書かせるために英順シートを使用した。また、英作文に苦手意識がある生徒のために、英順ルーラーの語順ごとに語彙を記載したワークシートを配布した。

(4) 授業の実際

ア 検証授業①

(ア) 単元名 Speaking Plus 3 「道案内」

(イ) 指導過程

本教材は、目的地への行き方を尋ねたり、教えたりすることができることをねらいとしている。スキット活動における語順指導を「提示→理解→練習→産出」の各段階で行った。まず「提示」の段階として、スキットの提示と文法説明を行った。電子黒板を使い、英順ルーラーを用いて日本語と英語の語順の違いを明らかにしながら文法の説明を行った。次に「理解」の段階として、「ことばのかたまり」を英順シートに記入させ、意味の理解を促した。「練習」段階では、語順整序や音読、インタビュー活動、スキットの練習をさせた。最後の「産出」の段階では、“should”を用いることを条件にしたスキットをペアで作成させた。英順ルーラーを使用させ、表現したい日本語を英順にさせた後、英文を書かせた。完成したスキットは、時間の都合上、全員の前で3組のみを発表させ、残りの生徒は紙上発表という形をとった。「練習」「産出」の段階では、常に英順ルーラーを使用するように促した。

イ 検証授業②

(ア) 単元名 Multi Plus 3 「好きなこと・もの」

(イ) 指導過程

自分の好きなこと・ものを紹介する4技能統合型の自己表現活動である。4文以上の英語で自分の好きなこと・ものについて書かせ、振り返りをさせた後、発表会を行った。

スピーチ活動における語順指導を「提示→理解→練習→産出」の各段階で行ったが、まず「提示」の段階で、重要表現の提示と文法説明を行った。電子黒板を使い、英順シートを用いて、日本語と英語の語順の違いを明らかにしながら、文法の説明を行った。次に「理解」の段階で、英順シートを用いて、意味の理解を促した。「練習」段階では、語順整序や音読、インタビュー活動をさせた。最後の「産出」の段階で、最上級を用いることを条件にしたスピーチを作成させた後、振り返りの時間を設定した。グループ内で語順をチェックさせ、アドバイスをさせながら加筆・修正を行わせた後に、発表会と評価を行った。時間の都合上、全員の前では3人のみを発表させ、残りの生徒は紙上発表という形をとった。

(5) 授業の考察

【検証の視点Ⅰ】では、「正確さ」を「書くこと」「話すこと」の領域で、【検証の視点Ⅱ】では「正確さ」を「書くこと」の領域で、「流暢さ」を「話すこと」の領域で表現力の高まりを測る。習熟度別に変容を見るために、NRTテスト（4月実施）で通過率の高い方から、A群10名、B群19名、C群6名にグルーピングを行った。

ア 【検証の視点Ⅰ】日本語と英語の語順を対比させる文法指導は、英語の語順の理解に有効であったか

「英順ルーラー」と「英順シート」を用いて日本語と英語の語順を対比させ、語順の「正確さ」を高める文法指導を行った。

(ア) 生徒の意識調査より

a 英順ルーラーと英順シートについて

検証授業②で、語順を分かりやすくするために、英順ルーラーにイラストと単語を付け加えた結果、「イラストがついているのでわかりやすい」という意見が多く挙がった。英順ルーラーが役に立った理由として、「英順ルーラーを見れば、何を書けば良いかわかったから」「分からないときに、どこにその語句を置くかを知ることができたから」などの意見が多く出た。

次に、「英順シートは役に立ったか」という質問では、「文法の理解に役に立った」が71%（28名）、「スピーチ作成に役に立った」が77%（27名）という結果となった。英順シートは生徒の語順の理解や産出を助けることが分かった。

b 英作文に対する意識の変化について

英作文する際の意識の変化を見ると、「日本語を英語にするとき、英語にしやすいように、日本語を言い換えて、英語の語順（英順）にしてから英文を作る」と答えた生徒が、英順ルーラーや英順シートを使用して文法指導を行った検証授業①の後から徐々に減る傾向にある（図3）。

また、「日本語ではなく、英語で考えるようにしている」と答えた生徒は、

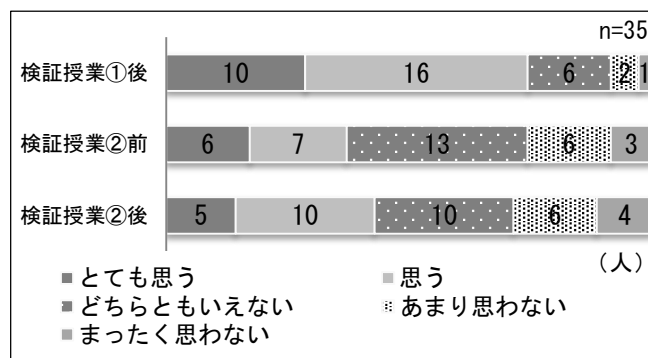


図3 日本語を英語の語順に変えてから英文を作る

検証授業の前後で増加している（図4）。これは「英順ルーラー」や「英順シート」で日本語の語順と英語の語順を対比し、英語の語順を理解したことによって、英作文時に日本語を介することなく、英語の語順で考えるようになったためだと考えられる。生徒の感想として「英順シートと英順ルーラーがあったので、苦手な作文もすらすら書いてうれしかった」や「分からないところは英順ルーラーや英順シートを使ったらわかるようになった」などの意見が挙げられた。

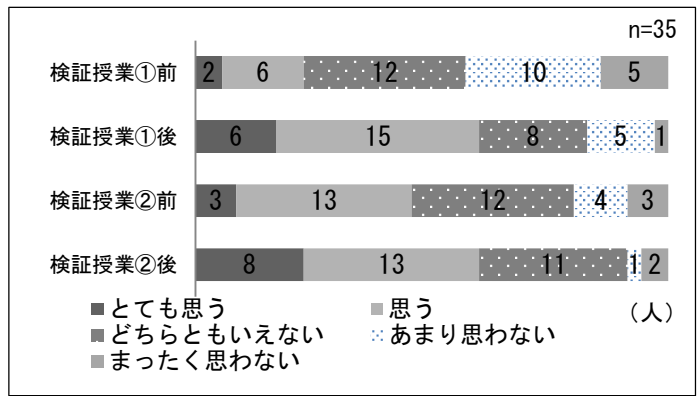


図4 英語で考えるようにしている

(イ) 「正確さ」について

「書くこと」においては、語順整序テストの結果より検証する。「理解」の段階で、英順ルーラーや英順シートを用いて文法を説明した後、「練習」の段階で、英語の語順で書かれた日本語を見ながら、英語を話す練習をさせ（英順音読）、直後に語順整序テストを行った。一人当たりの正答率は、検証授業①で88%、検証授業②では80%であった。このことから英順ルーラーや英順シートを用いて、日本語と英語の語順を対比させた語順指導によって、英語の語順を理解し、正しい語順の文にすることができたと言える。

「話すこと」については、スピーキングテストを行い、発話した英文の正確さを測った（テストの際、英順ルーラーは使用していない）。検証授業①の前後で、「昨日何をしたか」「今晚何をやる予定か」という質問を行い、正しい語順で応答した割合は、検証授業①前は50%だった。検証授業②後では、「一番好きなスポーツは何か」と「今晚何をしたいか」という質問を行ったが、正しい語順で応答した割合は、全体では93%となった。検証授業①前と比べると、43ポイント伸びた（図5）。また、文法の正解率は、検証授業①前は28%だったが、検証授業②後は74%となり、46ポイント伸びた（図6）。この結果から、英順ルーラーや英順シートを用いながら、日本語と英語を対比させる文法指導を行うことで英語の語順の理解が深まり、正しい語順で話すことができたと言える。

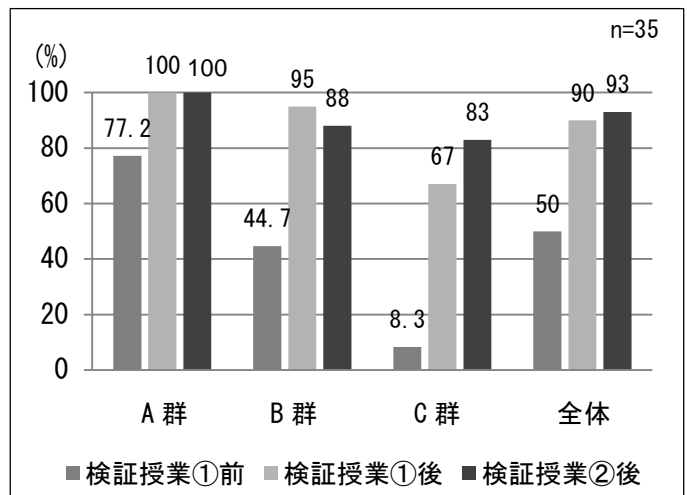


図5 スピーキングテストにおける語順正解率

以上のことから、英順ルーラーや英順シートを用いて、日本語と英語の語順を対比させる文法指導は英語の語順の理解に有効であると言える。

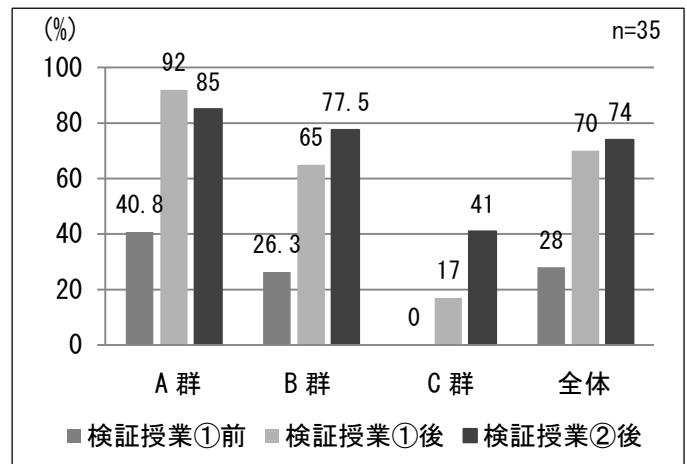


図6 スピーキングテストにおける文法正解率

イ 【**検証の視点Ⅱ**】 単元を通して、英順ルーラーや英順シートを用い、発話を促す言語活動を段階的に行うことは、場面や状況に合わせて自分の考えや気持ちを表現するのに有効であったか

場面や状況に合わせて自分の考えや気持ちを表現する言語活動として、スキット活動とスピーチ活動を段階的に行った。「正確さ」については、スキット活動とスピーチ活動において産出した文より検証し、「流暢さ」については、スピーキングテストの発話のスピードから検証を行った。

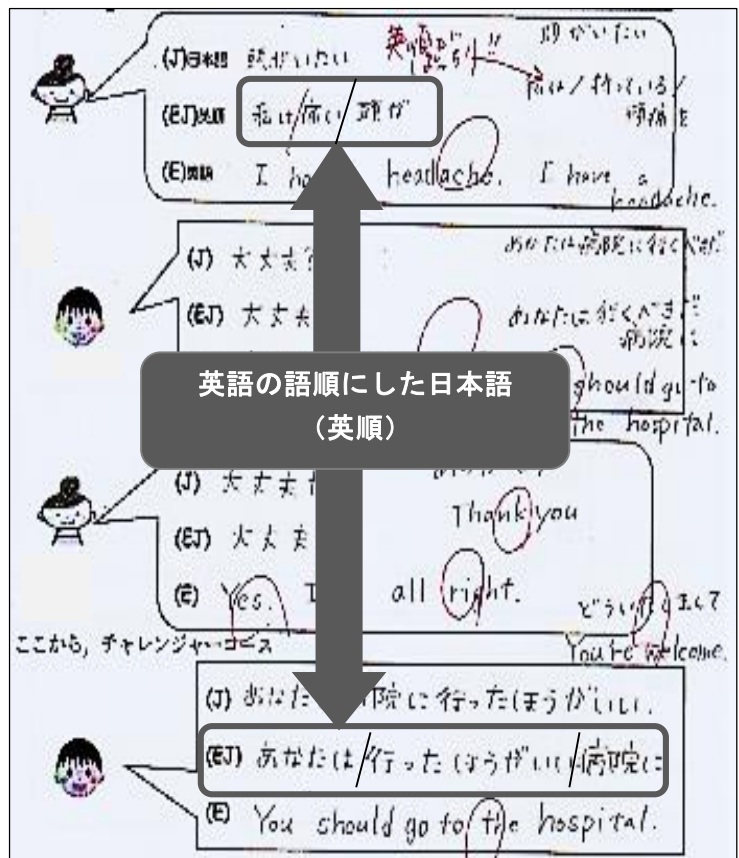
(7) 意識調査より

「自分の気持ちを伝えるのに英語の語順は重要だ」と考える割合が全体では検証授業①前 71% (25名) から検証授業②後 83% (29名) へと 12ポイント上昇した。これは、スキット活動やスピーチ活動を通して、語順の重要性を認識することができたためだと考えられる。

「自分の気持ちを表現することができたか」という質問に対し、「表現することができた」と考える生徒は、A群 9名 (10名中)、B群 15名 (19名中)、C群 4名 (6名中) で、全体では 28名 (35名中) という結果となった。「スキットを作っているうちに should の使い方が分かったし、言いたいことが言えてよかった」「最上級のことが最初は分からなかったけれど、スピーチ活動などをして分かるようになった」という生徒の感想からも、言語活動を段階的に行うことによって、生徒は「英語で自分の考えや気持ちを表現できた」と感じていることが分かる。また、「自分の好きなことなどを人に英語で伝えることができて楽しかった」という感想も多く、「英作文は楽しい」と感じる生徒は、検証授業の前後で増えた。また、26名 (35名中) の生徒が、「自分の考えや気持ちを表現するスキット活動やスピーチ活動は楽しい」と答えている。

(4) 「正確さ」について

スキット活動では、「練習」の段階で、基本表現の語順整序テストを文法説明直後と言語活動後の2回行った。正答率を見てみると、文法説明直後は80%だったが、スラッシュリーディングやインタビューゲームなどの言語活動を行った後は90%となり、10ポイント伸びた。しかし、助動詞“should”を含む文の正答率と比べ、言語活動を行っていない助動詞を含む文の検証授業後の語順整序テストの正答率は、検証授業前からわずか2ポイントしか伸びておらず、49%であった。このことから、言語活動が英語の語順の理解を助けることがわかる。「産出」の段階では、助動詞“should”を用いることを条件に、「困っている外国人にアドバイスをする」という場面設定で、隣同士のペアで自由に英順ルーラーを使用しながら、スキットを作成させた。日本語を英語の語順（英順）にした後、正しい英語の語順でスキット文を作成したことが、資料4から分かる。生徒が書いた全てのスキット文のうち、正しい語順で書けた文は94%であり、事前調査で行った4コマ漫画のせりふ（スキット文）の語順



資料4 生徒が作ったスキットの記述

生徒が書いた全てのスキット文のうち、正しい語順で書けた文は94%であり、事前調査で行った4コマ漫画のせりふ（スキット文）の語順

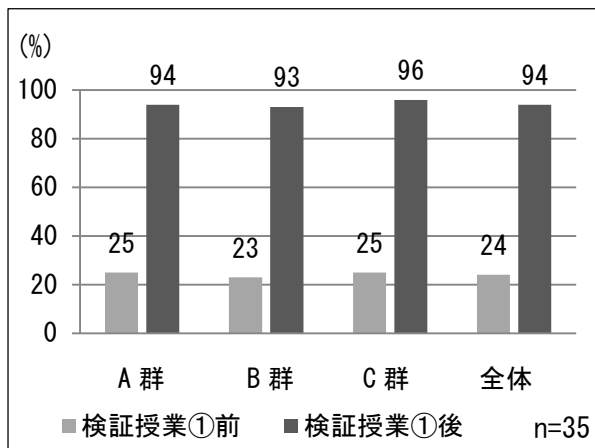


図7 スキット文の語順正解率

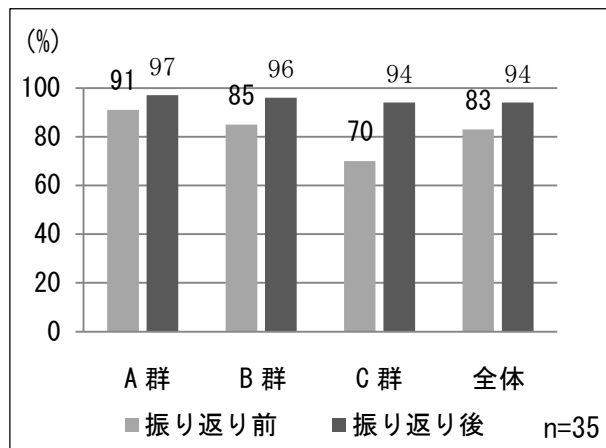


図8 スピーチ文の語順正解率

正解率24%と比べると、70ポイントの伸びとなった(図7)。検証授業②のスピーチ活動では、「産出」の段階で行うスピーチ作成の際、グループ内で振り返りを行わせた。お互いにスピーチ文の語順をチェックさせ、修正させた(資料5)。振り返り前に作成したスピーチ文の語順正解率は、全体では83%であったが、振り返り後は94%となり11ポイント上昇した(図8)。C群の生徒に至っては、一人で考えた時と比べて、24ポイント

* JUPERCコース スピーチ用 英順シート 私の好きなこと・もの(最上級を使って、紹介しよう！)
 ①文章構成を考えよう！ ②日本語を英順にして、英語を書きこもう！ ③書いたら、グループ内でチェックしよう！

ここに、文章構成(目的・説明/理由/付け加え/まとめ)を書く。 NO. NAME

No.	文章の構成	目的	説明/理由	付け加え	まとめ	英語	チェック
①	テーマ	話す(です)	だれ・何をに	どのように	どこで	いつ	○ or ×
②	理由	like	Kendo	the best of sports			○
③	説明	am	a member of the kendo club				○
④	理由	I	practice	Kendo	very hard		○
⑤	理由	I	like	Kendo			○
⑥	理由	because	I	feel			○
⑦	理由	but	fun				○
⑧	理由	when	I	have	a goal		○
⑨	理由	Why don't you	try				○

英語の語順にした日本語

グループで語順チェックを行う

資料5 スピーチ用英順シート

上昇している。個人でスピーチ文を書かせるだけでなく、グループで振り返る活動を加えたことによって、産出文の語順の「正確さ」が増したと考えられる。

以上のことより、英順シートを用いて、練習的な活動から、より自由度の高い活動へと、言語活動を段階的に行ったことで、英語の語順の「正確さ」が高まり、自分の考えや気持ちを正しい語順で表現できたといえる。

(ウ) 「流暢さ」について

「話すこと」は「書くこと」と異なり、生徒は知っている単語と構文でその場で即座に応答しなければならないため、何よりもスピードが要求される。ここでは、発話のスピードで「流暢さ」を測る。スピーキングテストにおいて、質問をされて話し始めるまでに要した時間は、検証授業前で平均9.2秒だったが、検証授業後は2.2秒と7秒短くなった(図9)。また、話し終えるまでに要した時間は検証授業前で16.5秒

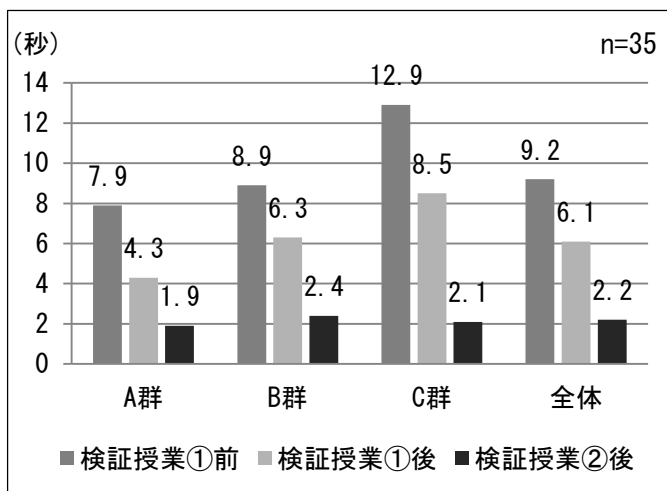


図9 話し始めるまでに要した時間

だったが、検証授業後は6.2秒となり、約10秒短くなった(図10)。英順ルーラーや英順シートを使用しながら、言語活動を段階的に行う中で、英語の語順が明確になった結果、発話のスピードが速くなり、発話の「流暢さ」が増したと考えられる。

以上の結果より、単元を通して、英順ルーラーや英順シートを用いて発話を促す言語活動を段階的に行うことは、自分の気持ちや考えなどを正しい語順で表現する力の育成に有効であると考えられる。

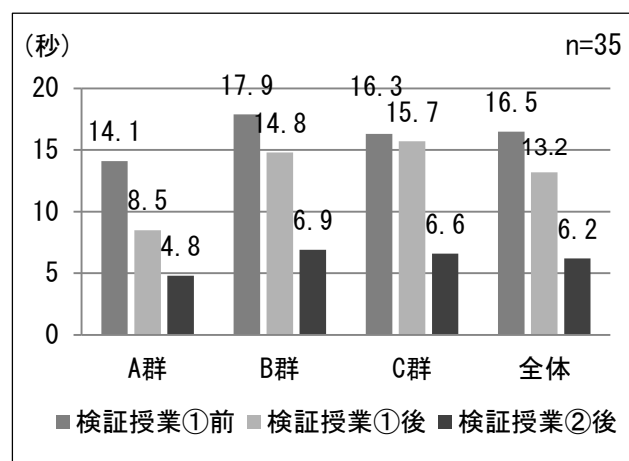


図10 話し終えるまでに要した時間

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

自分の考えや気持ちを英語で伝える力を育成するために、言語活動の中で語順を意識した文法指導の在り方を模索してきたが、本研究で次の点が明らかになった。

- ・正しい語順で自分の考えや気持ちを表現できるようにするために、日本語と英語の語順を対比させる文法指導は、英語の語順の理解に有効であった。
- ・単元を通して、英順ルーラーを用い、「理解→練習→産出」の流れで、発話を促す言語活動を段階的に行うことは、場面や状況に合わせて自分の考えや気持ちを表現させる手立てとして有効であった。

(2) 今後の課題

今回の検証授業では、正しい語順で書いたり話したりすることができるようになったが、正しい綴りで書くことや、正しい発音で話すことに関しては課題が残る。その原因としては、音声と文字のインプット・アウトプットの質や量の不足が考えられる。今後は音声や文字といった面にも焦点を当てて研究していきたい。さらに、「書くこと」「話すこと」の産出面だけでなく、「聞くこと」「読むこと」における語順指導も探っていきたいと思う。「聞くこと」「読むこと」と語順指導との関係性を研究し、手立てを工夫することによって生徒の英語運用能力を高めていきたい。

《引用文献》

- (1) 文部科学省 『中学校学習指導要領』 平成20年 p.5
- (2) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説』 平成20年 p.3
- (3) 田地野 彰 「新しい学校文法の構築に向けて」『平成20年度英語の授業実践研究』 2008年

《参考文献》

- ・村野井 仁 『第二言語習得研究からみた効果的な英語学習法・指導法』 2006年 大修館書店
- ・三浦 孝 『ヒューマンな英語授業がしたい』 2006年 研究社
- ・Gass S.M. 『Input, Interaction, and the Second Language Learner』 1997年 Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates